

アクセント規則

寺 嶋 大 輔

1 調査の目的

宮城県北端の沿岸部に位置する気仙沼市の方言は、アクセントの側面から見ると、特殊音調Ⅱ（平山、1957）、南奥特殊アクセント（田中、2005）と呼ばれる地域に属しており、この地域の典型的なアクセントパターンを有すると考えられている。

一方で、気仙沼市はすぐ北を岩手県の陸前高田市と隣接する。この陸前高田市を含めた、大船渡市、高田町、そして旧唐丹村（現釜石市の一部）一帯の方言は、山浦（2000）が「ケセン語」と呼んでおり、この地域のアクセントは独自の規則を持つという。

今回の調査では、気仙沼方言のアクセント規則にもケセン語との類似性が見られるか、特に尾高語のふるまいに注目して確認することを試みた。

なお、東北方言が音節（シラビーム）言語であるかモーラ言語であるかは議論の分かれるところではあるが、本文ではひとまず、特に断りがない限りモーラ言語とみなし、拍単位で分析を行う。

2 総論

2.1 先行研究

2.1.1 ケセン語のアクセント規則

ここでは、山浦（2000）の記述するケセン語のアクセント規則について簡潔に説明する。なお、山浦はケセン語を音節言語とみなしているため、ここでは氏の表記にもとづき、音節によって説明をする。

- ・語頭の高音を嫌う傾向がある
- ・高音は連続せずに、単立的にあらわれる

これらの特徴については、周辺の南奥特殊アクセント（田中、2005）にも見られる。

- ・助詞の第1音節で高音があらわれる語がある

他の地域には見られないケセン語特有の現象である。例えば、山（ヤマ）や犬（イヌ）は、南奥特殊アクセントでは単体で○●、助詞つきだと○●△という形で実現するが、ケセン語ではこれが単

体で○○、助詞つきでは○○▲となる^{注1}。山浦は、このような性質を②型音調と呼び、語自体がアクセントを持つ①型音調や、語自体はアクセントを持たない③型音調と区別する。

- ・n+2 種類のアクセントパターンを持つ

本来アクセントを担うべき箇所が特殊拍や無声音だったときなどは、アクセントは前方に移動する。この現象は、語頭のアクセントを避ける規則よりも優先されるため、ケセン語にも語頭にアクセントを持つ語は少数ながら存在することになる。さらに、先述の助詞にアクセントがあらわれる②型名詞、単語自体はアクセント情報を持たない③型名詞（無アクセント語）も加えると、ケセン語の名詞はn音節に対してn+2種類のアクセントパターンを持つと山浦は述べている。

その他の特徴としては、以下のようなものが挙げられる。

- ・1音節語のアクセントは●▲、○▲、○△の3パターンがあり、●▲は主に近代的語彙（「市」、「都」など）がこれに属する
- ・助詞自体もアクセント情報を持つが、前接の名詞部がアクセント情報を持っている場合は助詞のアクセント情報は表出されず、名詞部が無アクセント語であった場合のみ助詞アクセントが実現する（マデ=△▲、ヨリ=▲▲、バリ=△△など）

以上も踏まえつつ、2拍名詞におけるケセン語アクセントと南奥特殊アクセント、そして共通語アクセントを類によって比較すると、以下のようになる。

	ケセン語アクセント	南奥特殊アクセント	共通語アクセント
第1類	○○△	○○△	○●▲
第2類			○●△
第3類	○○▲	○●△	○●△
第4類	○●△		●○△
第5類			●○△

表1. 2拍名詞のアクセントパターン比較

2.1.2 気仙沼方言の先行調査

近年の気仙沼方言のアクセントについて調査されたものとしては、佐藤（2012）がある。

この調査では、調査対象者に対象語をともなった単純な文を発話してもらい、そのときのアクセントの実現状況を記録している。1拍～3拍名詞をこの方法で試したところ、以下のような結果となった（なお、山浦（2000）がアクセントの弁別で用いている「①、②、③型」と、佐藤（2012）が用いた「0、1、2...型」とは、意味が根本的に異なることを、ここで確認しておきたい）。

- ・1拍名詞を除いて、語頭ではアクセントはあらわれない
- ・1拍名詞では第1類は0型（単語内に高音がない）、第2・3類は1型（単語の第1拍に高音）の2種類のアクセントパターンが見られた
- ・2拍名詞では、第1・2類は0型、第3～5類は2型（単語の第2拍に高音）の2種類のアクセントパターンが見られた
- ・3拍名詞では、「桜」類は0型、「頭」類と「命」類は多くが3型（単語の第3拍に高音）、「兎」類と「兜」類は多くが2型という傾向の、3種類のアクセントパターンがみられた

なお、佐藤の調査では、東北方言では格助詞「ガ」「ヲ」を用いないことに着目して、共通語アクセントの影響（共通語的発話）が出ることを期待した助詞つき文と、方言本来のアクセント（方言的発話）が出ることを期待した助詞なし文の2通りのパターンを調査するという形式をとっている。上述の結果は「方言的発話」のものだが、助詞位置での音調の上昇の有無を確かめたい今回の調査では、同じ方法を用いることはできない^{注2}。

解決策としては、気仙沼方言でも、主格助詞・対格助詞以外の助詞は頻繁に利用されるので、これら以外の助詞を用いた文を読み上げてもらうことで、この方言の助詞つき文のアクセントを調べられることが期待できる。

もしもケセン語と同様のアクセント法則が気仙沼方言にも当てはまるとしたら、佐藤（2012）で単語部の語末にアクセントが置かれていると一律的にみなされていた単語群（例：2拍名詞なら2型、3拍名詞なら3型）は、助詞つきで発音すると、語末部にアクセントがあらわれる語（○●▲）と、助詞の第一拍にアクセントがあらわれる語（○○▲）の2種類に分けることができる（仮説A）。

あるいは、気仙沼方言はケセン語とは異なるアクセント体系を持っているとしたら、ケセン語の「語末高音①型名詞」と「②型名詞」という2種類に分けられる単語群は、佐藤（2012）の調査通り、気仙沼方言では区別されていないと考えることができる（仮説B）。

本実験では、気仙沼方言の母語話者に単純な文の読み上げをしてもらうことで、仮説A・Bのいずれが正しいのか検証する。

2.2 調査概要

調査語には、佐藤（2012）の選定語彙を軸に、1拍名詞は近代的語彙を、1拍・2拍名詞はアクセントが異なるミニマルペアの語を加え、合計29語を選んだ。

これらの語について、名詞単独の読み上げと、名詞に5種類の助詞（無助詞含む）を後続させた文節を含む文を作成し、それを調査者に読み上げてもらうという形式をとった（文はひとつにつき2回読み上げてもらった）。以下が、本調査にあたって選定した語のリストである。

血 (○△)	酒 (○○△)	桜 (○○○△)	(名詞のみ) (無助詞) モ (△) マデ (△▲) ヨリ (▲△) バリ (△△)
戸 (○△)	鮭 (○●△)	煙 (○○○△)	
都 (●△)	垢 (○○▲)	鏡 (○○●△)	
木 (○)	赤 (○●△)	男 (○○○▲)	
気 (○△)	鼻 (○○△)	頭 (○○○▲)	
手 (○▲)	花 (○○▲)	油 (○○ △)	
市 (●△)	石 (○○△)	兎 (○□○△)	
詩 (○△)	胸 (○○△)	狐 (○□○△)	
酢 (○▲)	稲 (○●△)	後ろ (○○□△)	
	海 (○●△)	卵 (○□○△)	

表2. 本調査に用いた語とケセン語におけるアクセントの実現パターン

なお、本報告で調査対象とした気仙沼方言話者は、1940年生まれの男性と1957年生まれの女性の2名である。

2.3 調査結果

調査結果は、以下の通りになった。

2.3.1 話者A (1940年生まれ、男性)

単語自体がアクセント情報を持たない無アクセント語（ケセン語における③型名詞）は、助詞にアクセントがあらわれる。そのアクセント位置は、若干の例外を含みつつも概ねケセン語における助詞のアクセント法則と同様であった（例：○○+マデ=○○▲▲、○○+ヨリ=○○▲▲、○○+バリ=○○▲▲）。

一方で、ケセン語における「②型名詞」（単語に助詞がともなった場合、助詞にアクセントが置かれる語）（例：○○▲▲）は、この話者については、名詞の最終拍にアクセントを置いていた（例：○●▲▲）。つまり、単語本体にアクセントを持つ「①型名詞尾高語」と同様のふるまいをするケースがほとんどであった。

その他、特徴的なアクセントがあらわれた語について述べる。

- ・「木」、「手」

ケセン語における実現アクセントは○▲だが、この話者は、無助詞文、モ文については単語部にアクセントを置いて発音していた（●、●▲）。助詞マデがともなう文はケセン語の規則と同じく、

助詞の第1拍マに高音があらわれていた(○▲△)。ただし、助詞バリがともなった際は、平板調に実現しており(○△△)、ケセン語と同様のアクセント規則は持たなかった。

・「市」「都」

全体的に高音位置が不安定で、有アクセント的にも無アクセント的にもふるまう現象がみられた。話者Aによると、そもそもこれらの単語を単体で言うような状況が考えられにくいとのことだったので、音調の不安定さはそこに起因すると考えられる。

・「酔」

ほとんどが語頭を高くするという、共通語的な印象を受ける読み上げになっていたが(●▲△など)、バリがともなったときのみ、助詞にアクセントがあらわれた(○▲△)。

・「男」

ケセン語では②型名詞に属する(○○○▲)。この話者の場合は、基本的に語末に高音を置いていたが(○○●△)、助詞バリがともなった場合のみ、ケセン語同様にバに高音を置いた(○○○▲△)。

・「油」

ケセン語では語末にアクセントを置く①型名詞であり(○○●△)、この話者もほぼ同様のアクセントの振る舞いをしていたが、助詞マデがともなった場合のみ、マに高音を置いていた(○○○▲△)。

・「バリ」

「1拍名詞+バリ」の場合、有アクセント語、無アクセント語の区別問わずほとんどが平板調で実現した(○△△)。

2.3.2 話者B (1957年生まれ、女性)

話者Bの場合、無アクセント語・有アクセント語問わず、山浦(2000)によるケセン語の記述や話者Aのアクセントとは異なった振る舞いをするが多かった。

まず、ケセン語では助詞「マデ」が無アクセント語にともなった場合、後方の「デ」にアクセントを置く(例:○○▲△)。ところが、話者Bの場合は例外なく前方の「マ」を高音にしていた(例:○○▲△)。助詞「バリ」については、ケセン語では無アクセント語にともなうと、文節内に高音はあらわれずに平板調に実現するが(例:○○△△)、話者Bは一部の単語で第1拍のバに高音を置いていた(例:○○▲△)。また、一部の1拍語についても、単語内ではなくバに高音があらわれるケースがいくつか見られた(「血」、「戸」、「詩」+バリ=○▲△)。これらの現象は、いずれも「マデ」は共通語の「まで」、「バリ」は共通語の「ばかり」のアクセントに引きずられた読み方になっていると推測するのが妥当であろう。

このように、1957年生まれの話者Bのアクセントは、1940年生まれの話者Aとも異なる様相を見せており、これは助詞のアクセント情報についても、伝統的な方言から変化が起こっていると考えるのが適切であろう。

その他の個別的な特徴は以下のとおりである。

・「男」、「頭」

これらはいずれも○○●が基本アクセントのようだが、助詞マデがともなったとき、マにアクセントが移動していた(○○○▲△)

・「狐」、「石」

これらの単語は、文全体は方言的なアクセントで読んでいても(=共通語に引きずられた読み方をしていない)、調査語については伝統的なアクセントではなく、共通語的なアクセントで読んでいた(狐=○●○→○○○) や石=○○→○●)。

なお、全体的に読み上げる文が、話者 A よりも共通語の影響を受けていると考えられることがかなり多い傾向であり、話者 B 自身も内省によりそれを自認していた。実際、文の読み上げではなく内省的に出てくる発話では、方言的なアクセントになることが多かった。概して、話者 B は、伝統的な気仙沼方言のアクセント的特徴を多く残しているとみられる話者 A よりも、アクセントの共通語化が進行していると考えられる。

2.4 考察

いくつかの例外は見られたものの、今回の調査結果を概括的にまとめると、尾高語は以下のよう

にふるまったと言える。

1 拍詞

- ・1 拍の助詞が後続するときは、名詞部に高音が置かれた
- ・2 拍の助詞が後続するときは、助詞の第 1 拍に高音が置かれた

2 拍名詞

- ・助詞の長さに関わらず、名詞の末部に高音が置かれた

3 拍名詞

- ・1 拍の助詞が後続するときは、名詞の末部に高音が置かれた
- ・2 拍の助詞が後続するときは、名詞の末部に高音が置かれるか助詞の第 1 拍に高音が置かれるかゆれがみられた

一方で、ケセン語のような、ある語は○●▲、別の語は○○▲と発音されるというような明確な区別は、今回の調査からは観測できなかった。この結果を見る限りは、仮説 A ではなく仮説 B (気仙沼方言では、ケセン語の「①型名詞尾高型」と「②型名詞」は区別されない) が正しいと言えそうだが、最後にいくつか気づいた点と今後の課題を挙げたい。

まずは、上述の通り、今回の調査ではケセン語における「語末高音①型名詞」と「②型名詞」の区別はあられなかった。しかし、だからといってただちに、気仙沼方言に「②型名詞」に該当するものが存在しないと断定できるわけではない。

例えば、当地の方言による自然な言語生活による会話を収録することをコンセプトとした「被災地方言会話集」に収録されている談話音声では、ケセン語における②型名詞について、助詞の位置に高音があらわれている発話を多く聞くことができる（特に、この資料に登場する男性話者は、今回の調査の話者 A と同一人物である）。例えば、「家」（イエ、イイと聞こえることも）は 2 拍第 3 類に属する語で、ケセン語でも②型名詞として分類されている。気仙沼方言では○●と尾高語としてあらわれるが、これに助詞がともなうと、○○▲、○○▲△など、ケセン語のように助詞位置に高音があらわれる発話が多くみられた。今回の調査でそういった現象がみられなかった原因を推測すると、作成した文がそういったアクセントを実現するものでなかったなど調査方法が不十分だったか、あるいは調査が実験室的な環境だったために日常生活的な方言発話があらわれなかったなどの理由で、この話者たちの本来のアクセント情報を十分に引き出せなかったという可能性も十分に考えられる。実際、調査後に話者 B から話を伺うと、「書いたものを読むときと、書かないで自然に言うときとは全然違う言い方になってしまう」と振り返っていた。

次に、今回の調査結果では、「3 拍の名詞+2 拍の助詞」の読み上げで、○○●▲△～○○○▲△というゆれが観測されたが、これは志津川方言のアクセントを調査した大西（1989）のものと類似している。志津川町（現・南三陸町）は気仙沼市の約 30km 南に位置するが、大西によると、ここの方言では、3 音節以上の名詞の語末音節にアクセントを持つ語に助詞マデが後続すると、アクセント位置が助詞のマに移動することが報告されている。ただし、アクセント位置が名詞位置に留まるか助詞位置に移動するかにはゆれがあるという。今回の気仙沼調査の結果が旧志津川町同様にこの地域の方言に広く見られる現象なのか、あるいは個人差なのかは、さらに調査を重ねて検証する必要がある。

また、今回の調査結果では、1 拍名詞と 3 拍名詞について、後続する助詞が 1 拍か 2 拍によって異なったふるまいをみせた。この結果からのみによって一般化することは危険だが、この現象も、今後の調査について示唆を与えてくれる。例えば、五十嵐ら（2012）は琉球宮古語池間方言のアクセントについて調査を行い、この方言のアクセント体系は、従来の研究では二型であるとみなされてきたが、実は三型体系であることを報告している。この中で五十嵐らは、「ある言語・方言のアクセント体系を記述する際に、単独で発話された語または助詞を付けて発話された語を分析するだけでは、誤った結論を導く可能性があることを示している」と述べている。実際、従来のアクセント研究では「名詞+（1 拍の）助詞」という組み合わせのみを分析することが暗黙の了解として存在していた。今回の調査結果も、五十嵐らの指摘するとおり、何らかの見落とされているアクセント法則が潜んでいるのかもしれない。また、アクセントの「ゆれ」として分析している現象も、あるいは語連鎖などにより何らかの規則が働いて生じた可能性もある。今後は前後の語の組み合わせなどにも考慮しながら調査を行う必要があるだろう。

なお、気仙沼方言の CD 付きテキスト「気仙沼のこばなし」（三陸ことば研究会、2015）に収録されている音声を聞いてみると、ケセン語で②型名詞と分類されている語は、いずれも①型名詞の尾高語と同様に、その単語の末尾拍に高音があらわれており、先述の「ゆれ」もまったく生じない（な

お、この読み上げ CD の方言の語り手は 1974 年生まれである)。この CD の音声と、今回の調査結果とをあわせて推測すると、気仙沼にも、かつてはケセン語同様に「②型音調」、あるいは「②型音調」的特徴に準ずるアクセント現象が存在していたが、それらの語のアクセント位置は、時間の経過と共に単語の末尾へと移動・固定しつつある、と仮定することもできる。いずれにせよ、ここからも気仙沼方言は「伝統的な方言」とみなされてきたアクセントから変化しつつあることを伺わせる。

以上、今回の調査結果についていくつか考察を試みた。この地方の方言のアクセントの変遷については、従来の考えでは単純化が進み、宮城県南部のように無アクセント方言に移行しつつあるという見方が主流であったが、その正確な実態がつまびらかにされないうちに、異なるアクセント体系を持つ共通語に淘汰されつつあるというのが実情である。東日本大震災が沿岸部方言の衰退に追い打ちをかけている今、この地域のアクセント法則の実態について、至急にさらなる調査を続け、考察を深めていく必要がある。

注

- 1 類似した現象は山形県の鶴岡市方言にもみられる。例えば、2 音節名詞第 3 類は、単体では ○●だが、助詞つきでは ○○▲となる (新田、1994)。
- 2 なお、山浦 (2000) によると、ケセン語では主格の格助詞は a/ġa が用いられ (直前の音声的環境によって使い分けられる)、対格の格助詞は存在しない代わりに、語末の音調の操作で対格をあらわすという (①型名詞の尾高語 : 拍内下降、②型名詞 : 拍内上昇、それ以外 : 最終拍の長音化)

文献

- 五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』 vol.12, pp.134-148
- 大西拓一郎 (1989) 宮城県志津川町方言の名詞のアクセント--音節単位によるモーラ方言の分析--『国語学研究』 vol.158, pp.68-81
- 佐藤亮一 (2012) 「アクセント - 気仙沼市」小林隆・編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』
- 三陸ことば研究会 (2015) 『気仙沼のこばなし』真間書院
- 田中宣廣 (2005) 『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう
- 東北大学方言研究センター (2013) 『伝える・励ます・学ぶ被災地方言会話集』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター (2014) 『生活を伝える被災地方言会話集 1』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 東北大学方言研究センター (2015) 『生活を伝える被災地方言会話集 2』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

東北大学方言研究センター（2016）『生活を伝える被災地方言会話集 3』東北大学大学院文学研究科
国語学研究室

東北大学方言研究センター（2017）『生活を伝える被災地方言会話集 4』東北大学大学院文学研究科
国語学研究室

新田哲夫（1994）「鶴岡方言のアクセント」国立国語研究所『鶴岡方言の記述的研究』 pp.81-140

山浦玄嗣（2000）『ケセン語大辞典』無明舎出版